八島

特113
889

始

特113
889

八島

内之部巻之十一ノ二

役別		装束附
シテ	漁翁	〔面〕朝倉、三光尉にも 襟 尉髪 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇 釣竿
ツレ	男	襟 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇 釣竿
後シテ	源義經の靈	〔面〕平太 襟 黒垂 梨子打 白鉢巻 着附厚板 法被 半切 腰帯 太刀 扇
ワキ	旅僧	着流し僧
ツレ	從僧二人	右同断

所	讃岐國屋島	類別	二番目
季	三月		

解説

一枚表 ワキ次第『月も南の海原や』と謡ふ。

次第にてワキ、同ツレ二人と出で、舞臺に入り向き合ひ、着詞濟み三人共脇座に行き座着く。

一枚裏 シテサシ『面白や月海上に浮んでは波濤夜火に似たり』

一聲にてシテ、ツレを先に立て出で、橋懸にて正へ向き止め謡ひ出す。此處少し位ありて謡ふべし。『曉湘水を汲んて……』より調子に心つけ同吟す。

二枚表 二人『里近し』此處にて二人共舞臺に入り、ツレ中に、シテ常座に立ち、

同 シテ『一葉萬里の船の道』と、ハツキリ謡ふ。

三枚表 上歌の中『浦風迄も長閑なる』此處にて二人入れ替り、シテ中にて床几、釣竿捨てる。ツレはシテ柱の際にて釣竿捨て、扇抜き持ち、脇正面へ出で、正中へ向き下に居る。

五枚裏 地『扨慰みは浦の名の』此地謡ひ方心得あり。

六枚裏 シテ詞『安き間の事語つて聞かせ申候べし』此處にて扇抜き持ち、『いで其頃は元暦元年……』と、改め謡ふ。以下ツレとの懸合は追々に進み謡ふべきなり。

八枚裏 地『はちつけの板より引きちぎつて』此地はかゝりてつけ謡ふ。

九枚表 同『御馬を汀に……』此處にてシテ、床几より立ち種々の形あり、見計ひ謡ふべし。

九枚裏 同『磯の浪松風計りの音さびしくぞ成りにける』此處、謡、形とも大事の所なり、何れも習ひ口傳

十枚表 地『實にや言葉を聞くからに』此處心持變へて謡ふべし。

十枚裏 同『夢はしさまし給ふなよ』と、中入。

同濟み、ワキ待謡、右終つて、後シテ、一聲にて出で、舞臺に入り、開き、

十一枚裏 シテ『落花枝に歸らず』と、ハツキリ謡ふべし。

十二枚裏 地『武士の八島にゐるや月弓の』此地かゝりてつけ、『とにかくに執心の』より

へて謡ふべし

同 クリ 地『忘れぬものを閻浮の故郷に』クリにてシテ、中へ行き床几。

十五枚表 地『其時兼房申すやう』此地改めて謡ふ。

十六枚裏 地『勇者はおそれずの』此處にてシテ、床几立ち形あり、見計ひ謡ふ事肝要なり。

十七枚表 地『矢叫びの音、震動せり』と、カケリ。此邊の謡ひ方、文意を考へなば、心持自づから會得せらるべき筈なり。

同 シテ詞『今日の修羅の敵は誰ぞ』此詞ハツキリ強く謡ふべし。

以下キリ、シテに形多し、從つて謡にも緩急少からず、篤と見計ひ謡ふ事大切なり。

大 5. 4. 7 内交

八嶋

ワキ 月も南の海原や八嶋の
浦をたづねん 是は都方より
出たる僧にて候我いまだ四國を見ず候
ほどに此度思ひ立西國行脚と志
候 春霞うきこちく限乃みち

はるはるしけり日本雲も影ぞなし
て其方と行けどもはてなく
あまりしる海路くれば潟のうら
寒き嵐にしく　おもしろや
月海の上に浮むで波濤夜も静かなり
似たり　漁翁よる西岸に傍て
宿す暁湘水を汲んで楚竹を焼く
焼くも今に知られたり芦火の影ぞ
ほのかにみゆるものすごさよ
月の出潮の沖つ波　霞の小
舟浮かぶ風情にて　海人の呼び声
里ちかし　一葉萬里の舟の道

唄 帆の風にはらむ ツレ上 夕顔の
空は雲乃波間にゆく月も霞て
吟中 かすみにさそふ松原の陰のみどりに
うちよする浪岸にうちもよせ
ぬれの袂に夕露やはかなく
らみまで 宮島の八景乃うつつに

悪れやみ居も知らぬに 上 鍋綱
とゆも波乃よくぐ霞ららり
て沖まくやあゆ乃小船のほれ
くやまでて結る夕暮風
追も長閑なるまでや花さき揃よ
ちんく 四半程 揺屋のまれ揃りて

ご誠へ宗旨させからりやと思召ばいつまで
是迄の念仏はそらく安楽の中は
調まで浄土の後ゟ法国一見は
傳へられし一家の宗旨も替りなく誓
流し給へあすしみ甘かれべしいつり
みしば法ゟ一見の法傳は一座の

お宗旨はかり館のはかりの事は
称名の法座ばかりはつまづきをかしく
畏りしばお宗旨にあやまりくば
鉄は刀の茶香の称名けつまづきを
作事いやしく見苦しさは
若しかりしばし称名は元がね教がくし乃

着きて須磨の浦めぐり一見此事に
てんこの日に参りて候へば一夜と
童子に申し候 ワキ 心得申し候 ツレ 今
ねよし申して候へば拾人なる都の
人にて候のこの日に参りて候へばむか
御つき申して候 シテ 何の旅人か

都の人と仰候か ワキ さん候 シテカヽル 実に
此程は都にも聞え給ふらめお
宿もなくして申さん ワキカヽル 木の下影を
みるもあしの屋れ シテカヽル 唯草枕と
思ひめき ワキ上 袖をもせよ八照
きたなり シテ上 墨雲もやらぬまたれあの

上二人
繊月ハ夜なく袖もおかさ露れ
とゐハ鳴るなるる高き川の
苔むしろハ痛りしやさらく
あはれは浦のうらがなしき
みるめなさばさせば騒ぎよまさらう
雲井なる晴ればれん猶への古

郷も都と聞なれはなつかしや我
あはれなれハ遊猶く渡るむさび
きさりく　旅宿いつも申はおかなき
尋らん似合ぬ所なるてらく苦
げに一住所に深みよ家れ合
我のちに見る心残りて浮ば寝る

八
六

語つゝく流の中のきく　シテ詞　あらさらば

のろかゝりて申し候べし

いで其比は元暦元年三月

十八日の事なりしに平家は海

のおもて一町計に船を浮べ

源氏は此汀に打出給ふ大将

軍の御出立には赤地の錦のひたゝれ

に紫裾濃の御着背長

鐙ふんばり鞍かさにつゝ立あがり

一院の御使源氏の大将検

非違使五位の尉源の義経と

號

名のり給ひし御骨柄あつぱれ

大ねやとかくし今は様子を思ひ
出されては平家のなる
よりも言語道断かはしまし然
船で敵漕よせて浮らちぎらるゝ
おりまちかけて壇の浦を待居たりしに
源氏の方にも遠く兵五十騎

びつくり伴ふも三ほの屋は四郎と
名のりてぞまつせん敵へかくし
扇に平家の方にも悪七
兵衛景清と名乗ぶ刀ほのや
きよめのまき羽織しに彼三種
はやらず時よは太刀かたなにし力

ちからなく少し汀に引退きしに
景清追かけみほのやが着たる
甲のしころをつかんで後へ
ひけばみほのやも身をのがれ
んと前へ引く互にえい
やとひくちからに鉢附の

板より引ちぎつて左右へくわつと
ぞのきにける是を御覧じて
判官御馬を汀にうちよせ給へば
佐藤継信能登殿の矢先にかゝつて
馬より下にどうど落れ
ば舟には菊王も討れければ

うらわびしきこの海ハ沖ハ隠れ
陸はあれにてつねに塩のあらき
磯乃庵たえてばかり浪まつ風
ばかりなる寝覚はげしくぞ成にける
上哥
ヨワ
ふしぎなりとよあまびとの住
ウ
春まよ我語ちらるさら葉なく

シテツレ二人上ゲ
や我らが何とて涙の袖や
あさましき我も乾くひまなき九重の上
あはれならぬみぞしてもゆう
まし
上ゲ
うきや此世にすがる
其名ゆかしき若草の
シテツレ二人
昔語
かへるみの衣
地
まろうへ衣

まぎれ夜乃くしほのおつる暁
あかつばきゆられ時よおさるべし甚
時のやぎ那らんやまのくん縦なるの
らばしもらんのこ世の義經の浮
世の夢ばし覚し頗よなよく
同 ふしぎや今まれ昔ぐくのゆるらんを

尋ねし菩みず義經の世の夢
おもろげなさでまでとやかはる
辞も定めうら風ればく松が根
まくらやぶれて思ひはちぎれ縮る
昔もしろ重て夢も新みぐり
〱
落せ枕よかゝるぐ破

鏡にうつし照さば我ながらも恐ろし
悪魅の姿かはりて鬼神魍魎
の境界に入りて我と浮身をしづ
めて修羅のちまたによりくる
うき波のはかなしは葉風
の露　ワキカヽル　ふしぎやさても早暁なるに

殊や帰ると思へは宝殿より甲
冑を帯しみえ給ふは判官にて
御入るの　シテ詞　わきよしつねの継
霊なるとの頃に思はれぞと見ゆ云ふ乾ね
て平家西海の浪につゞよびけまゝはれ
三頃輪まり　ワキせん　思ひやまぬ心のつきなみ

すゞみの海とも見へゆきも白妙月の

シテ「まこと夜もすがら墨の心もなき

る今宵は

ワキ「昔語をなされ

候へ　シテ「舟と陸との合戦の

ワキ「ありかたくて　シテ「思はれ候ぬ　武士

は鳴くなるや月も弓も梓の

身なるまことに修羅の道は迷

ひぬる事まことにきるぞや　はすみの

海山をはるかに明けるや　聞ゆる鳴

乃ありしやどよみ聞くる執心の

ばり群れゐるの浪までも寄せ摂る

津の海　見まぬなれを

津蒙りく

閻浮の故郷にたちかへりしさし
なかれおふの夢路に通ひきて候
羅道のありさまあらあら現すなり
思ひ出づるもの月も今宵
に似たりける平家の者は出でつゝ舟や
沈まずまづれにたちんせし跡へ海

まつくみ駒をとなくぐるを浦へ入く
見ちかへしれくいだみなみえして
きめたるつふ　其時何とかの志
くめりまんぐ武弓をよぐれかし
浪にゆられて流れしに　松の
打ちもかへり引　櫂まで空遠く

流れしを　敵に取らさじと

じと駒を浪におよがせて敵船の

ちかく成し程に　敵はこれを

見しよりも船をよせ熊手にかけ

て既にあやうくみえ給ひしに

されども熊手を切払ひ弓

を取かへし本の汀にあがれば

其時兼房申やう口惜の御ふる

まひやな渡辺にて景時が申し

もこれにて候たとひ千金

をのべたる御弓なりとも御命

にはかへさせ給ふべきかと

況しやきれば判官是をせずし
郎従やよつてもちせしむる所へ
義経聴後まるごろ答せず行く
わるうしかし経までも佐藤は
ひきふちのぶ郎らぼされば保ら
さき歌まとられよつねちぶ無也

やよいもれんおや母念の政青ちする
遂よしそれあらねけまん然ちりる
ありし義経が運れ極でと思すべし
ざらば歌うすりけくとて況しや
ひらうる弐のらつまで代なあ
らばやうと語り給くつか是よるさて

ともがらまでも皆感涙を流
しけり　智者またまかどりはもて
勇者そおそれずのやかたけれ
乃撥ら敵するにえつゝ勇しき
おしむはなのあをとは溜めぬそ
命なればかを捨て社信統

みな佳名をよふむつゝまて筆に記
ちなくまれ　またこ修羅道の時
乃声　きえさきびれおとざんきう
きり　きえつの志ゆく乃敵を
たゝ役雑覚せるき捨とをや労く
しや手ものはちりぬ思まぞせる

櫻乃すつるの 上 直ちに軍令ハ

夫やく闇深ゆかるはまその

海山一同に震動して彩より

あつ時の音 陸には彼乃そ

月ふ志[illegible]ゑ 剣れ見より

うつほまうつ[illegible]は かぬまれ

偲れ影 水やうらくゆくも

まうく雲の浪乃流谷さしもよ

る揃軍れきさうちぢむ

かくを[illegible]彼の[illegible]浪より明で

敵[illegible]乃[illegible]て君みるかくもあ時

乃声と共の[illegible] 八浦風[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

大正五年四月四日印刷
大正五年四月九日發行

著作權所有

東京市深川區西平野町一番地
著作者 寶生九郎

東京市日本橋區通四丁目八番地
發行者 江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地
發行所 椀屋謠曲書肆

東京市神田區皆川町二番地
印刷者 田村茂太郎

2??
4??

終